

出題分析		
試験時間 60 分	配点 70 点	大問数 1 題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]		難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>近年、課題文の数が一つの場合と二つの場合があったが、今年は課題文が二つの出題形式であった(2013・20・22年度と同じ)。課題文の分量は、昨年より1ページ半ほど増加した。設問について、Aは課題文の内容について説明する問題(200字)で、Bは自分の考えを論述する問題(400字)であり、例年と同様の出題だった。設問Aは、例年の経済学部らしいスタンダードな内容説明問題だが、まとめるべき内容が明確であるため、受験生間の得点差はつきにくいだろう。一方設問Bは、課題文二つをもとにアファーマティブ・アクションがトリアージとどのように異なるかを説明した上で、今後の社会における希少な資源の割り当ての方法を考えると、理解力と発想力が問われる問題だった。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	<p>課題文の内容理解を問う問題1問(200字以内)、意見論述問題1問(400字以内)</p> <p>出典： [課題文Ⅰ] 松島齊『サステナビリティの経済哲学』(岩波書店、2024年) [課題文Ⅱ] 南川文里『アファーマティブ・アクション 平等への切り札か、逆差別か』(中央公論新社、2024年)</p>	<p>課題文Ⅰは、サステナビリティ、生態学者ハーディンの理論、トリアージという三つの考え方について書かれており、課題文Ⅱは、アファーマティブ・アクションについて書かれている。これらは、入試でも頻出の考え方である。設問Aは、「救命ボートの倫理」と「トリアージ」の違いと、ハーディンの説明がサステナビリティの精神とかけ離れている理由を書く問題。ハーディンの説明がサステナビリティの精神からかけ離れている理由は、本文の記述から自分で読み取ってまとめる必要がある。設問Bは、アファーマティブ・アクションがトリアージとどのように異なるかを説明した上で、今後の社会における希少な資源の割り当てについて書く問題。希少な資源というと、本文や解答例に挙げたような人的資源のほかにも、石油などのエネルギー資源、食料資源などが思いつく。しかし、これらをどのように割り当てるか(何を重視して分けるのか、どう分けるのか)を考えるのは難しかっただろう。</p>	標準

合格のための学習法

例年、経済学部では課題文の理解を確認する問題と、それを踏まえて自分の見解を述べる問題が出題される。そのため、まずは文章読解の訓練を積極的に行おう。具体的には、現代文の記述問題を解き、その文章を要約する練習が効果的である。2013・20・22・25年度のよ
うに、課題文が二つ提示される出題形式であっても、文章読解の訓練をしていれば十分に対応できるだろう。また、「原発問題」「市場経済と技術革新」などの時事的なテーマの問題が出題されることもあるので、知識を蓄えるために日頃から新聞やニュースサイト、社会問題を扱った教養番組などを見て勉強しておこう。さらに、過去に出題された問題と類似したテーマが出題されることもあるので、過去問演習に積極的に取り組もう。